

子供と風邪 雜感



羊蹄医師会
さとう内科医院

佐 藤 忠 弘

私は当地で開業して20年になります。乳児はあまり診ませんが、子供からお年寄りまで来院してくれる患者はほぼ全て診てきました。冬はインフルエンザ、春は保育所に通い始めた幼児の風邪。

しかし、今年は新型コロナウイルスの流行で状況は一変しています。SARSもMERSも日本とは別の世界のものでしたし、いわゆる新型インフルエンザも要はインフルエンザで脅威に感ずるものではありませんでした。私自身は幼少期に感染し、抗体を持っていたと思われました。しかし、今回の新型コロナウイルスは多分誰も感染したことはなかったであろうウイルスのようです。2月、北海道に上陸したときは開業医の方も随分と緊張したことと思います。緊急事態宣言、学校の休校が宣言されたときは医療従事者の子供をどうするかで、外来の縮小をするところもありました。しかし、保護者の方は大変でしたでしょうが、休校が長引いてもそれなりに回っていました。

通常であれば4月の保育所、幼稚園が始まるころは新入所、新入園の子供は風邪のやり取りをして小さい子供の受診が増えるのが常でした。しかし、今年の4月5月は当院では幼児の受診がほぼゼロでした。6月に学校、幼稚園等が再開になり、ちらほら子供が受診するようになってはいますが、これまでよりはかなり少ないと感じています。自粛生活、手指消毒、手洗いの効果なのでしょうか。このままの感染予防をしていると今シーズンのインフルエンザの流行は小規模なものになりそうな感じがします。感染症が少なくなることに越したことはありませんが、子供は普段の生活の中でいろいろな病原体にさらされて免疫を獲得していくものではなかったのかと思います。

新型コロナウイルス感染も落ち着いて学校も再開されて、子供たちの登下校姿も見られるようになり、世の中も落ち着いて来たかに見える昨今ですが、このまいまいわゆる新北海道スタイル、新生活スタイルを続けていけるものでしょうか。新型コロナウイルスに関しては早く有効なワクチンが開発されることを願うばかりですが、いつか今までの普通の風邪が子供たちの間で爆発しないか不安に感じます。ただ今回のウイルスも子供たちにとっては普通の風邪程度のようですが。

コロナ禍、非コロナか



羊蹄医師会
ニセコ医院

河 合 貴 之

昨今、新型コロナウイルスは地域医療を担う医療機関にとって殺人ウイルスとなっている。一度医療機関の職員ましてや医師がコロナウイルスに侵されると診療所は閉鎖を余儀なくされ、収入も無くなり、地域医療は崩壊、地域住民からはバッシングを受ける。たとえコロナウイルスが去ったとしても患者が戻ってきてくれるかは不透明で、地域住民の信頼を損ねた診療所は信頼を取り戻すのにどれくらいの時間がかかるだろうか。考えただけでも恐ろしくなる。

そんなことを考えていたある日、高校生の娘が38℃の熱を出した。2ヶ月間自宅自粛生活を終え、別地域にある寮生活を開始した3日後のことであった。娘は2ヶ月間、外に遊びに行ったりせず、自宅に閉じこもりの生活を送っていたため、コロナ感染は否定的であったが、熱が2日3日と続くと不安になつた。熱以外の症状は全く無いことが、更に不安を増強させる。もしもコロナ陽性であれば、私との接触は濃厚接触者となるため、娘は妻と一緒に別宅で、生活することとした。

発熱から3日目に我慢できず、保健所に連絡した。しかし、熱のみの症状では検査の対象者ではないと断られた。不安は募るばかりであったが、本人は何食わぬ顔でゲーム機と遊んでいるのが救いであった。今の検査体制は新規の感染者を捉える事はせず、濃厚接触者のみを重点的に検査しているように感じる。プロ野球選手は症状に関係なく、全例検査している報道に違和感を覚えながら、4日目となつた。まだ37.5℃前後の微熱は続いている。遂にシビレを切らし何とか検査をしてくれる病院を紹介してもらい受診した。

いざ検査を行うとなるとまたいろいろ考えた。陽性であつたら、妻は濃厚接触者となって、50歳を超えているので重症化する可能性もある。重症化して入院でもしたら、誰が面倒を見るのか診療は続けられるのか、さまざまなどを考えた。妄想にはキリがない。万が一の事が起これば、3人の子供たちは私が育てなければいけなくなる。娘と妻を生活させた責任は私にある等の葛藤も生まれた。娘は再び高校生活が送れるだろうか等々、ここは心を落ち着けて検査の結果を待つた。結果は陰性であったが、結果が出るまでの一晩は長いものだった。陰性の結果を受け再び同居生活を送れるようになったが、いろいろと考えさせられ、心身共に疲れ切った1週間であった。